

大先輩徳永さん

小林一夫

1993年8月20日の私の日記には、次ぎのように書いてあります：“徳永名誉会長の米寿祝賀の会（昼食会）が、大阪工業英語研究会の有志一同で行われ、水上先生も遠路、東京から出席された。徳永さんのお宅から近いということで、JR 茨木駅の少し西側にある「いばらき京都ホテル」が、その会場であった。徳永さんはこの近くで開業されているご次男の隣に住んでおられ、ご次男の奥様が付き添ってこられるほど、足が不自由に見受けられた。（中略）徳永さんが何時もなつかしんでおられる旧制六高の寮歌を、徳永さんとともに、三井、高木両氏と私で合唱する一幕も。有志の出席者は、水上先生、研究会のOBを含め17名であった。（以下略）

それから約半年後、ご次男の奥様から研究会の幹事当て、徳永さんご近況についてのご通知があり、寝たきりになられ反応がないと、かなり老衰が進まれたことを知らされ（1994年3月19日の研究会にて回覧）、そして3月31日に永眠されました。私が徳永さんに初めてお会いしたのは、この研究会に入れて頂いた1984年8月のことです。

紹介者は旧制第六高等学校（略称六高で岡山にあった）の2年先輩に当たる。現在ドイツ語の翻訳を主にやっている酒井さんという人で、彼から「六高で私と同期であった、三井さんと、三井さんと一緒に、研究会の中心である前川さんに連絡してあるが、別に、六高の大先輩がおられる」との連絡をもらいました。その大先輩が徳永さんでした。

研究会の席上で最も感銘を受けた徳永さんの第一印象は、大先輩であるにも拘らず水上先生からの問題を、我々同様、前に出て真剣に黒板に翻訳され、分からないところをご質問される、真面目なそして実に謙虚なご態度でした。

何かの話をしているとき、あなたは何年の生まれかと聞かれるので、大正8年（1919年）と申し上げると、徳永さんは「その年には中学校に入っていました。」と言われ、その中学校名を聞くと、岡山一中（旧制、現在は旧制女学校を吸収、新制朝日高校として六高跡にある）とのお答えを頂き、計らずも徳永さんが中学、高校を通じての大先輩であることを知りました。

六高ご卒業後、金属材料のメッカと言われた、東北大学の金属関係に進学され、その後湯浅電池に入社された由です。この研究会の創立、その後の会の運営上の困難の克服等の話を聞きましたが、徳永さんご自身も、このようなご苦勞をされてこられただけに、この研究会を人一倍愛され、界の発展に寄与されんとする熱い思いが「水上先生講義ろく抜粋」の作成に、そしてご健康の都合で研究会にご出席が困難になられた晩年には、1992年1月15日から1993年7月24日までの「キーワード」へと結晶したものだと思います。

翻訳という面での徳永さんについては、他の方々より多くの思い出を持っておられると思いますので、主として六高の大先輩とし

ての徳永さんの思い出を記したいと思います

六高の卒業生の大阪での集まりに、六高同窓会大阪支部というのがあり、六にちなんで、毎年6月6日に大阪で支部総会と懇親会を開催しています。この会で徳永さんにお目にかかったのは、私の日記や写真アルバムからは1989年6月6日です。それまで私もその会に毎年出席していなかったのですが、研究会に入れて頂いてから5年も経っていますが、この六高会でお会いする機会がなかったのかも知れません。その時はお孫さんが付き添いで来ておられました。会の後半には、懐かしい寮歌を高唱するのが常です。以後、私が毎年出席したにも拘らずお目にかからないので、研究会の時に伺いますと「我々には非常に懐かしく、愉快なひと時ですが、孫には退屈極まるようで」とやや寂しそうな徳永さんのご返事でした。この頃は研究会が終わると「足が遅いから先に帰ってください。」と言われたのですが、極力、地下鉄までお伴しました。

1990年11月3、4日六高創立90周年記念同窓会が岡山で開催されました。4日の夕方、六高時代の校庭（現在、そのまま朝日高校が使用）で、ファイヤー・ストーム（焚き火を囲んで寮歌を歌う）を行い、その後、昔、寮から歩いた通りを提灯行列をして、岡山の中心街まで歩きました。徳永さんも、この約2.5kmほどの道をお元気に歩かれ、終点の中心街でお友達と休んでおられるところを写真に撮りました。そのとき「創立95周年にも、こうして岡山でお会いしましょう。」と申し上げたら「それは恐らく無理で、私はこれが最後と思っています。」とのご返事でしたが、悲しいことにそれが本当になっ

てしまいました。

奥様を亡くされ、又、ご自宅で転ばれ骨折されたこと等があつてから目立って弱られたように思います。

以後、研究会に来られる朝は、ご子息の運転される車で来られ、帰りはタクシーで帰られることが続いたようです。そのお姿も見られなくなり、次にお目にかかったのは米寿祝賀の席でした。

徳永大先輩。水上先生を柱として、あなたが基礎を置かれた、この「大阪工業英語研究会」は、あなたのお精神を籠めて作られた会です。この会をますます発展させることは、あなたのお精神がいつまでもここに生きることです。そのようにするのが我々の任務であると信じています。

徳永大先輩、どうぞ安らかにお眠りください。